

縄文土偶にみられる衣装表現の図像学的研究

吉田 泰幸

考古学専門 後期課程 3年

はじめに

本研究の報告を以下のように進める。まず、フィールド調査をおこなう前の作業仮説について詳説し、その時点での課題を示す。次にフィールド調査の詳細を述べ、最後に調査をおこなった結果、課題がどの程度解決したかについて述べ、今後の課題について述べる。

総じて作業仮説の検証は進展し、一定の成果を得ることができたと考えている。

フィールド調査前の作業仮説

フィールド調査前の作業仮説は、「縄文時代後期にみられるある種の土偶にみられる体部表現は、ミノ・ムネアテ・コシミノ等の衣装をあらわしているのではないか」というものである。具体的には以下に述べるとおりである。

縄文時代においては織物は存在せず、衣服も編物によって製作されていたことが予想されている。確実な衣服そのものの出土はいまだみられないが、漆漣などに用いられたアンギンとよばれる細密な編物が出土しており（写真1）、それらが土器底部の圧痕として残ることもしばしばみられる。それらは当時の技術的水準を伝えると同時に、技術的制約をも伝える資料である。それらは現存する民具である「越後アンギン」と共通する製作技法によって製作された。その技法はタテ糸をヨコ糸に絡ませる「もじり編み」である（写真2）。この技術はその後米俵などにも用いられることになる。そしてその米俵は絵巻物などにも描かれることになるが（図1左）、共通する作画方法として、もじって編み込むタテ糸の間隔が編み込まれるヨコ糸のそれよりも広く、俵そのものの特徴をよく捉えている。このような作画方法は同じく「もじり編み」で製作されるアンギン（同右）や、俵・アンギンと異なり、錘を用いず手のみで編まれる笠、蓑が絵画に描かれた場合も同様である。今回着目した土偶には、それ

らと同じ特徴をもつ描線がやや稚拙さを感じさせるものの、一定のパターンでみられる。より間隔が広いタテ糸と考えられる描線がヨコ方向にみられることが共通しており、これらは「もじり編み」によって製作された衣服を表現しているのではないかと考えられた。



写真1 縄文時代遺跡出土のアンギン（渡辺誠氏提供）



写真2 現在の越後アンギン

上：錘具を用いた「もじり編み」
下：完成したアンギン



図1 絵巻物にみられる「もじり編み」製品

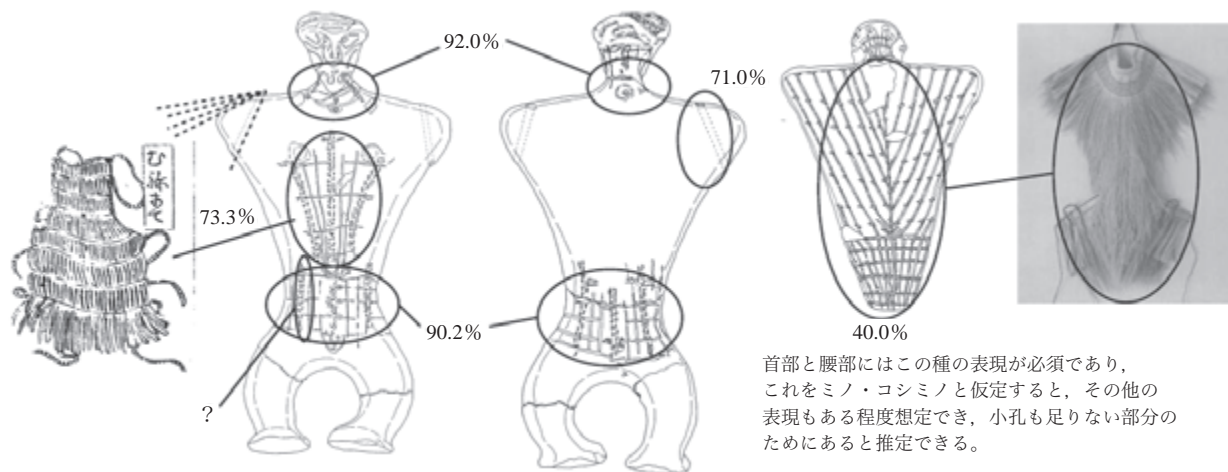
この種の土偶は縄文後期（約4000年前）の24遺跡から100例が出土しており、その各部位に「もじり編み」表現が次のような確率で見られる。首部には92.0%の確率で正面・背面ともにみられ首部を1周する。胸部にこの表現がみられた場合は背中にはみられず、かつこの種の土偶の73.3%を占める。腰部には90.2%の確率で正面・背面ともにみられ腰部を1周する。その他、背中には逆三角形の描線が40.0%みられる。腹部には山形の描線あるいは若干の盛り上がり46.7%みられる。肩部から腋部にかけて小孔がうがたれることが多く、71.0%にみられる。腹部を中心に、何条かタテ方向に描かれる文様要素がある（図2中「？」とした部分）。これらを総合すると、タテ方向に描かれる文様要素の解釈は留保されるものの、首・腰部にみられるものはミノ・コシミノのもじり編みされた部分であり、胸部にみられるものがムネアテ、背中の中逆三

角形・腹部の山形はミノ、肩部から腋部の小孔は繊維束などを差し込み、ミノ表現の足りない部分を補填する、とすれば（図2）、これらの土偶は「北越雪譜」にみられる、各種「もじり編み」製品の雪中歩行用具を身につけた姿（図3）をあらわしているのではないかと考えられた。この種の土偶が主に分布するのが青森・秋田県という多雪地帯であることも、この作業仮説に有利に働くと考えられた。また、これらは仮面を表現したのではないかと考えられるものも多く、そうだとすれば仮面および雪中歩行用具という旅の装束を身につけた姿であり、現代のなまはげにも連なる可能性を想起させた。このことは土偶からみた衣装の研究のみならず、当時の生活文化をより一層解明するものとして期待できた。

しかしながら、現存する民具のミノ等はワラで製作されることが多い。縄文時代は稲作以前の段階であり、したがってその当時ワラの入手は不可能であり、その他の自然素材を用いて製作されていたことを想定しなければならない。そこで現存民具の雪中歩行用具やそれに類する製品の中で、ワラ以外で製作されたものでどのような素材があり、どのような製作技法で作られているかを確認する必要があった。フィールド調査に先立って、遠藤武氏の著作にみられたミノの素材は以下のとおりである。

「藁、マダ、管、タツノヒゲ、海管、クゴ（水草）、ヒロロ（みやまかんすげ）、山葡萄、うりの木、しでの木など」（遠藤1985）

岩手県在住で民具研究をおこなっている名久井芳枝氏の著作『実測図のすすめ』中にもマダ皮（シナノキの内皮）製の「ケラ」が掲載されていた（名久井1986）。



首と腰部にはこの種の表現が必須であり、これをミノ・コシミノと仮定すると、その他の表現もある程度想定でき、小孔も足りない部分のためにあると推定できる。

図2 調査前作業仮説の説明図



図3 「北越雪譜」にみられる雪中歩行用具

その他、管野新一氏の「山村を生きる人びと」(菅野1961)の中に、「普通の蓑はワラミゴで作ったが、上等のものはクグやオッカ(オアカともいい、ウリハダカエデのこと)、マダの皮などで作った」という記述がある。

ある程度ワラ以外の素材があることも明らかになっているものの、写真資料はすくなく、上記の視点による研究の基礎資料としては不十分なのが現状である。そこで、上記に類する製品が多く所蔵されていることが予想される機関での調査を計画した。

また、各遺跡の発掘調査報告書に掲載されている今回検討対象とした土偶の実測図は上記の視点で書かれた訳ではなく、その場合に肩から腋の孔の有無や背面の文様構成が確認できない実測図も多くあった。そのため、それらを実見して直接確認する必要がある。そこで、ある程度の量を実見することができる機関において調査をおこない、上記で示した文様パターンの法則性が妥当なものかどうかを検討した。

この2つの課題、「ワラ以外の雪中歩行用具やそれに類する製品の素材にはどのようなものがあるか」、「土偶実測図の不備」、を解決するためにおこなった調査について次節で詳説する。

フィールド調査の詳細

・岩手県盛岡市中央公民館

『岡本太郎の東北』(岡本・飯沢編2002)にも写真が掲載されている「マダケラ」の観察・撮影をおこなった(写真3)。マダ(シナノキの内皮)が大部分、



写真3 「マダケラ」
(盛岡市中央公民館蔵)



写真4 「むねあて」
(盛岡市中央公民館蔵)

首から肩にかけてはぶどう皮(山葡萄が考えられる)。首の部分に文様が編み込まれている。

「ムネアテ」の観察・撮影をおこなった(写真4)。「網代編み」と「もじり編み」が併用されている。アオノキ(柎の地方名)製。

その他、ワラ製の「ケラ」1点、「マダケラ」3点、「クゴケラ」3点、マダ製・クゴ製の「コシミノ」各1点、クゴ製の「ミノボッチ」1点が確認できた。「クゴケラ」という名称とはいえ、クゴは一部にしか

用いられていないことが後の調査で分かった。大部分はワラである可能性が高い。それを差し引いても、ワラ以外で製作されたものが多いことが分かる。岡本太郎の撮影年が1957年) 採集年が分かるもの1点が1973年であった。採集年の記録がないものが多かったが、少なくとも高度成長期以前まではこのようなワラ以外の素材でこの種の製品が製作されていたことが少なくなかったことがうかがえる。

・平泉町文化財センター

土偶の調査。「ムネアテ」にあたる表現がない土偶1点(写真5)。現在の集成では岩手県内では、この種の土偶自体が少なく、母数は少ないながらも「ムネアテ」にあたる表現がない例が多い。日本海側と太平洋側の積雪量の差に起因している可能性をうかがわせた。

・秋田県北秋田市(旧鷹巣町)文化会館

伊勢堂岱遺跡出土土偶の調査。27点みられた。胸部を確認できたものはすべて「ムネアテ」表現のある例であった(写真6)。岩手県内とは対照的である。実測図では確認できなかった小孔の有無や背面の文様構成を確認した。また、調査前の資料集成では把握できていなかった他遺跡の資料を数点確認することができた。それらの文様構成も同様の法則性がみられることを確認した。

・秋田経済法科大学総合研究センター雪国民俗館

館長である鎌田幸男氏の案内で見学、資料の撮影をおこなう。「ケラ」はワラ製7点、マダ製の「ケラ」が2点みられた。ただしワラ製のうち1点は、盛岡市中央公民館所蔵の岡本太郎撮影のマダケラのように首部に文様が編み込まれていた(写真7)。このようなケラは「ダテケラ」といい、婚姻の際の祝い物を運ぶ際に用いられていたらしい。労働着とはいっても、場面による使い分けがあったことが伺い知れた。また、婚礼の際に男性が女性に「ケラ」を贈るということもあったらしい。他の1点はところどころマダ・クゴがアクセントとして使用されていた(写真8)。同様の例はワラ製の「ミノポッチ」にもみられた(写真9)。その他、「加賀蓑」とよばれる萌黄の網がかかったミノを観察することができた(写真10)。遠藤氏の著作にも記述があり、庄内地方ではこれを着て「ダテケラ」同様に婚礼の荷物を担いだようである。このような網をさらにかぶせる例のあったことは、伊勢堂岱遺



写真5 「もじり編み」表現土偶
(平泉町文化財センター蔵)



写真6 「もじり編み」表現土偶
(北秋田市教育委員会蔵)

跡出土土偶にみられる体部正面の全面にみられる「もじり編み」表現(写真6)は、この種の「もじり編み」ではない「網」を表現したものと捉えなければならない可能性を生じさせた。「ムネアテ」は木綿製品のみであった。これら民具の詳しい目録は作成中とのことであり、採集年・製作者などのデータは後日を待たなければならない。

鎌田氏によれば、「ミノ」、「ケラ」、なまはげの衣装である「ケデ」はそれぞれ構造の異なるものであり、これらを「ミノ」という名称で一括することには問題があるとの教示を受けた。本報告でも土偶の衣装想定の際に名称は「ミノ」で統一しているが、仮に縄文から現存民具にまで物質文化上の連続性を認めるとするならば、名称については再考が必要であることがわかった。



写真7 「ダテゲラ」
(雪国民俗館蔵)



写真8 「ダテゲラ」？
(雪国民俗館蔵)



写真9 「ミノボッチ」
(雪国民俗館蔵)



写真10 「加賀蓑」
(雪国民俗館蔵)

フィールド調査終了後の検討

ワラ以外の素材による雪中歩行用具やそれに類する製品は、現存民具の中で数多くみられることがわかった。複数素材を組み合わせる例やその使用方法なども新たに知ることができた。その製作技法は手による「もじり編み」を主体としており、稲作以前（＝ワラ以前）である縄文時代遺跡出土の植物質遺物の製作技法によって、製作可能である。その素材はマダが多いが、多岐にわたっている。また、土偶にみられるタテ方向の何条かの文様については、現存民具においてクゴなどをアクセントとして用いているが、その様子と

類似している。民具の構造を実見することにより、文様解釈のヒントを得ることができた。また、「ダテゲラ」の首部の編み込みは文様帯を呈しているが、これが仮に何段にも及んだ場合、図2の右にみられる土偶背面のように見える可能性がある。

出土土偶について、発掘調査報告書では確認できない部分を確認でき、新出資料を確認できたことから、図2の数値が若干変化する。しかし、大きな変化はなく、文様パターンの法則性を再確認できた。

さらに、「ダテゲラ」にまつわる話など、労働着としてのイメージが定着しているこれらの民具が、一張羅、贈物としても機能する場があったことは、一般に祭祀における使用、あるいは司祭者の人物を写したものと想定されている土偶にこの種の製品が表現される理由の一端を示していると言える。

今後の課題

課題のひとつは、素材の獲得・加工方法・製作技法のさらなる調査があげられる。これらの製品を作った経験を有する人はかなりの高齢であることが予想される。名久井芳枝氏の著作には製作方法を含めたレポートがあり、シナノキ等樹皮については名久井文明氏の著作がある。このように一定の調査がおこなわれているが、クゴは水草と言われているが詳細は不明であったり、製作経験のある人が居住する可能性がある土地名は数ヶ所ご教示ねがえたが、今後調査をおこなうには、やや具体性に欠けている。

また、名古屋大学博物館には「考古学のための民具資料」として漁具・容器を中心としたタケ・ワラ以前の自然素材による民具コレクションが存在するが（渡辺1999）、今回調査をおこなった「ダテゲラ」等もこの種の目的意識をもったコレクションのための調査収集の対象とし、基礎資料の充実を図ることも必要であろう。この種の調査にはさらに大規模な悉皆調査が必要であろう。

さらに、今回の作業仮説のとおりヒトは「もじり

編み」製品を錘を用いて製作される俵・アングインと、手のみで製作されるムネアテという製作技法の差を問わず認知し、一定のパターンで絵画等に表現するかどうかとも今後の課題であろう。「信貴山縁起絵巻」の俵の表現や「北越雪譜」をみると、そのパターンには時期差をこえて、ある程度の普遍性があると考えられるが、実験等が必要かもしれない。

謝辞

調査研究にあたって、以下の方々、機関にお世話になりました。記して感謝申し上げます（個人・機関とも五十音順、敬称略）。榎本剛治、鎌田幸男、千葉信胤、村上千晶、渡辺誠。秋田経済法科大学附属雪国民俗館、北秋田市教育委員会、平泉町文化財センター、盛岡市中央公民館。

引用文献

- 遠藤武 1985 『遠藤武著作集』文化出版局
 岡本敏子・飯沢耕太郎 2002 『岡本太郎の東北』毎日新聞社
 菅野新一 1961 『山村に生きた人びと』未来社名
 久井文明 1999 『樹皮の文化史』吉川弘文館
 名久井芳枝 1986 『実測図のすすめ——モノから学術資料へ——』一芦社
 渡辺誠 1999 「タケ・ワラ以前の編組製品」『名古屋大学古川総合研究資料館報告』15 pp. 73-101